

年間第 17 主日 7 月 25 日 分かち合い

連日猛暑が続いていますが、ようやく夏休みに入り、コロナの感染が収まらず、開催が危ぶまれたオリンピックも一昨日始まりました。感染がこれ以上拡大せず、人々に喜びと希望をもたらすものとなるよう祈りましょう。

教会の典礼は、今年は、B 年で、主日にはマルコが読まれてきましたが、今日は、特別な祝日でもないのに、ヨハネから読まれました。マルコ福音書は、マタイ・ルカと比べて短く、そのため、途中でヨハネ福音書が導入されたのだと説明されます。今日から8月の間、いのちのパンについて記したヨハネ6章から読まれることになっています。

パンを増やす出来事については、復活節の間にもよく読まれ、なじみ深い話ですが、今日は、1点にだけ絞ってお話したい。それは、イエスが多くの人々に不思議な力でパンを増やして与えられたとき、必ず、残ったパンについての言及があることです。ヨハネ福音では、5つのパンと二匹の魚もっていた少年が登場し、そのわずかのパンから、5000人の人を養うに足る量のパンを与えられたことになっています。そして、すべての人が満腹したとき、イエスは「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われ、そのようにすると、12の籠がいっぱいになるほどだった、と福音書は記しています。ヨハネだけでなく、共観福音書も皆、同じように書き添えています。

これは何を意味しているのでしょうか。それは、神がなさることは、人間が必要としていることを満たすだけでなく、いつもそれを上回るほど、豊かに与えられることを意味しているのではないのでしょうか。今日の第一朗読、列王記の記述の中でも、預言者エリシャは、飢饉のとき、「初物のパン、大麦パン20個と新しい穀物」をもって、100人の人々に分け与え、さらに、「彼らはそれを食べきれずに残した」と記されています。神のなさりかたはそのようなものです。わたしたちが生きているこの大地、そこに生きる命、植物と動物、それは、決して人間が生きるに必要なだけの量ではなく、それを遥かに凌駕するものです。一体なぜ、それほど多いのかと驚くほど、豊かに与えられています。それは、神の心の豊かさを表すためではないでしょうか。

人間の心は、神のころと比べて本当に小さなものです。人に振舞うにしても、常に無駄にならないように、必要なだけ与えようとしします。しかし、人間が互いに与える者はいつも限られていて、それがもとで、喧嘩が起きたり、紛争が起きたりします。神が与えるものが、いつも人間の必要を超えているのは、人間がそれによって豊かなものとなり、自分のことだけでなく、人々のことも考え、さらには、お互いの一致を考える余裕をもつためではないでしょうか。今、まさに、人類が最も必要としているワクチンのことを考えれば、それは、明らかになるでしょう。

今日、この後、洗礼の恵みを受ける方は、こうした豊かな神のいのちに与る恵みをお受けになるのだということを考えましょう。人間が与えるものは、いつも不足がちであったり、ぎりぎりであったり、まったく満足にあたえることのできないものだったりします。しかし、神が与える恵みは、いつも人間の予想・期待を超えています。貧しいものを富ませ、力のない者に力を与え、落ち込んでいたものに希望を与えるものです。どうして、そんなに、あふれるほど、いただけるのか、と驚かされます。それが、神の恵み、創造のみわざの特徴です。洗礼を受ける方が、そして、洗礼の恵みを受けたわたしたち皆が、そんな神の豊かさに満たされ、その喜びを人々と分かち合い、平和と一致のために働くものとなれまうよう祈りましょう。(S.T.)